日本学術会議 中国・四国地区ニュース

No. 52
2021. 3

発　行
日 本 学 術 会 議
中国・四国地区会議

記　　事

日本学術会議の地区活動　１頁

【寄稿】
人文学を核とする異分野融合研究の推進　５頁

健康を対象とし異分野統合を目指した研究科の開設　６頁

【公開学術講演会報告】
「地域にある大学としての先端学術の振興と地域産業イノベーションへの貢献」を、初めてのオンラインで開催　８頁

会員・連携会員一覧（中国・四国地区）　１０頁

地区会議事務局からのお知らせ　１２頁

日本学術会議の地区活動

日本学術会議中国・四国地区会議　代表幹事
第三部会員（広島大学 学長特命補佐（研究人材育成担当））
相田　美砂子

一年前の今頃には全く思いだにしていなかった状況が、新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の感染拡大により引き起こされ、世界中で深刻さが強まっています。これまで経験したことがない事態に対応するためには、しっかりとした学術的知見が必要です。2020 年は、エビデンスに基づいた科学的知見、及びその発信の重要性が、社会のなかで強く認識された年となりました。

「エビデンス」としては、例えば、様々な文献、臨床結果、実験やシミュレーションによって得られるデータなどが挙げられます。どのような分野、あるいは、どのような局面においても、正しいデータに基づき、さらにそれを正しく読み取ることが、正しい判断とそれに基づく的確な行動のために必須です。一面的でなく多くの視点からのエビデンスに基づくことも重要です。

日本学術会議 第 25 期が 2020 年 10 月に始まりました。10 月 1 日に開催された総会（会員が出席）において、梶田 隆章 教授が第 25 期会長に選出されました。会員（定員 210 名）及び連携会員（約 2000 名）の任期は 2 期 6 年です。日本学術会議には総会、幹事会のほか、三つの部会（人文・社会科学、生命科学、理学・工学）及び 30 の分野別委員会、等が組織されています。日本学術会議において、会員／連携会員が 30 の分野別委員会のいずれか（複数可）の委員として活動することを経糸とすると、緯糸の活動が、全国に 7 つ設置されている地区会議です。中国・四国地区は、鳥取県、島根県、岡山県、広島県、山口県、徳島県、香川県、愛媛県、高知県で勤務する会員／連携会員から構成されており、第 25 期は、会員 8 名（女性 2 名、男性 6 名）、連携会員 104 名（女性 29 名、男性 75 名）、計 112 名です（2021 年 2 月現在）。県別の会員／連携会員の一覧は、本ニュースの pp. 10～11 をご参照ください。

各地区会議には、それぞれの地区の運営及び活動について審議・決定するため、地区会議運営協議会が置かれています。運営協議会委員の選出にあたり、中国・四国地区では三つの条件（各県に必ず 1 名以上の委員、原則として会員（県に会員がいない場合は連携会員）、分野のバランスをとる）を付しています。この条件の下で、第 25 期運営協議会委員として、6 名の会員に加えて 6 名の連携会員を選出しました（2020年10月）。また、代表幹事は、相田が務めることになりました。

第 25 期日本学術会議　中国・四国地区会議運営協議会委員の人数分布

中国･四国地区会議運営協議会委員	女性	男性	計
人文・社会科学系（第一部）	1	1	2
生命科学系　　（第二部）	0	6	6
理学・工学系　　（第三部）	2	2	4
計	3	9	12

第 25 期日本学術会議　中国・四国地区会議運営協議会委員

氏　名	所属　職名　等	期	部会等	分野別委員会
相田 美砂子（代表幹事）	広島大学特任教授･学長特命補佐	24～25	第三部会員	化学
坂田　省吾	広島大学大学院人間社会科学研究科教授	25～26	第一部会員	心理学・教育学, 基礎医学
市川　哲雄	徳島大学大学院医歯薬学研究部教授	24～25	第二部会員	歯学

仁科　弘重	愛媛大学理事・副学長	24～25	第二部会員	農学, 食料科学
狩野　光伸	岡山大学大学院ヘルスシステム統合科学研究科教授・副理事	25～26	第二部会員	基礎医学, 薬学
堀　　利栄	愛媛大学理工学研究科教授・学長特別補佐	25～26	第三部会員	地球惑星科学
荊木　康臣	山口大学大学院創成科学研究科教授	25～26	連携会員	農学, 食料科学
河田　康志	鳥取大学理事・副学長	24～25	連携会員	基礎生物学
小林　祥泰	島根大学医学部特任教授、島根大学名誉教授	24～25	連携会員	臨床医学
那須　清吾	高知工科大学教授・学長特別補佐	24～25	連携会員	総合工学, 土木工学・建築学
松本　直子	岡山大学大学院社会文化科学研究科教授	25～26	連携会員	史学
笠　　潤平	香川大学教育学部教授	25～26	連携会員	物理学, 心理学・教育学

2020 年 9 月末に表面化した新会員の任命をめぐる問題が、日本学術会議の在り方そのものへの疑問提示に拡大し、大きな問題としてマスコミにも取り上げられるようになりました。マスコミや SNS において、誤解あるいは曲解に基づく議論や投稿がなされることがありました。正しいデータに基づく議論となっていないことが多々あり、正しいエビデンスを、正しく把握されるように発信する困難さを痛感させられることになりました。

この間、日本学術会議が様々な指摘に対し実施した記者会見資料やＱ＆Ａが公開されています[1]。2020 年 12 月 16 日には、1)科学的助言機能の強化、2)対話を通じた情報発信力の強化、3)会員選考プロセスの透明性の向上、4)国際活動の強化、5)事務局機能の強化、の 5 項目の改革についての検討過程が、「日本学術会議のより良い役割発揮に向けて（中間報告)」として公表されています[2]。梶田会長は、日本のすべての学術分野を代表するアカデミーとして、英知を結集して地球の多様な課題の解決にとりくんでいきたい、そのためには、科学者が高い倫理観と責任感をもち学術の観点から独立して自律的に科学研究を行うことができることが不可欠、と述べられています[3]。2021 年 1 月 28 日には、日本学術会議幹事会声明「日本学術会議会員任命問題の解決を求めます」を出し、2021 年 4 月に開催する第 182 回総会を控えて、すみやかな任命を求めています[4]。2021 年 2 月 27 日には、学術フォーラム「危機の時代におけるアカデミーと未来」がオンライン開催され、多重の危機下にある今、求められる、ナショナルアカデミーの役割について議論されます[5]。

COVID-19 の感染拡大は、未だ、先を見通すことができない状況が続いています。COVID-19 は、これまで見過ごされがちであった様々な社会的課題を浮き上がらせてもいます。人文・社会科学、生命科学、理学・工学のすべてから成る日本学術会議は、より長期的な、また、学術の立場から COVID-19 対策の検討と情報の発信を行っていくことができます[6]。

中国・四国地区会議のコアな活動は、年 1 回の公開学術講演会の開催と、この地区ニュースの発行です。2020 年度の公開学術講演会は、「地域にある大学としての先端学術の振興と地域産業イノベーションへの貢献」（愛媛大学、2020 年 11 月 21 日）です。新型コロナウイルス感染症の感染拡大防止のためオンライン開催となり、多くのオンライン参加者がありました。詳細は本地区ニュースの報告をご参照ください。

中国・四国地方には、多様な分野の科学者が在籍し、また、大学だけでなく公的あるいは企業の研究機関も多くあります。世界でもユニークな技術を有する多くの企業があります。さらに、中国・四国地方は、移動が不便な場所が多く、地図上の距離より、実際にかかる時間が長い、という「特徴」がある地域です。その「特徴」は、これまで「不利」と捉えられてきました。それぞれの地域に生まれた「点」と「点」が結びついて「面」になるような、活動の多角的推進が困難、という状況が続いていたためです。今後、オンラインの活用、さらに、DX（デジタルトランスフォーメーション）が浸透することにより、その「特徴」は、むしろ、「有利」と捉えられるようになります。居住あるいは勤務する「場所」に起因する障壁は消えて、さまざまな活動が、もっと自由に、活発にできるようになります。日本学術会議という横断的なつながりを活用して、多くの活動をつなぐ役割も果たしていきたいと考えています。

[1] 記者会見資料：http://www.scj.go.jp/ja/member/iinkai/kanji/kisyakaiken.html
Ｑ＆Ａ：http://www.scj.go.jp/ja/scj/qa/index.html
http://www.scj.go.jp/ja/member/iinkai/kanji/pdf25/siryo304-QandA.pdf
[2] 「日本学術会議のより良い役割発揮に向けて（中間報告）」（日本学術会議幹事会）（2020 年 12 月 16 日）
http://www.scj.go.jp/ja/member/iinkai/kanji/pdf25/siryo305-tyukanhoukoku.pdf
[3] 第 25 期日本学術会議会長　梶田隆章　挨拶（2020 年 12 月 28 日）
http://wwwc.cao.go.jp/lib_011/head/message/kajita-1/kajita-1.html
[4] 日本学術会議幹事会声明「日本学術会議会員任命問題の解決を求めます」（2021 年 1 月 28 日）
http://www.scj.go.jp/ja/member/iinkai/kanji/pdf25/siryo307-ninmei.pdf
[5] 学術フォーラム「危機の時代におけるアカデミーと未来」（日本学術会議主催）（2021 年 2 月 27 日）　http://www.scj.go.jp/ja/event/2021/307-s-0227.html
[6] 日本学術会議幹事会声明「新型コロナウイルス感染症対策の検討について」（2021 年 2 月 9 日）
http://www.scj.go.jp/ja/info/kohyo/pdf/kohyo-25-kanji-2.pdf

人文学を核とする異分野融合研究の推進

日本学術会議中国・四国地区会議　運営協議会委員
連携会員（岡山大学大学院社会文化科学研究科教授）
松本　直子

新型コロナウイルスのパンデミックは一年たっても終息の兆しを見せず、世界の死者数はすでに 200 万人を超えている。コロナ禍を乗り越えるために、ワクチンの開発や感染防止の方策等についての理化学的な研究は当然推進されているが、私たちの生き方、社会のあり方も感染症の動向に深くかかわっていることも認識されつつある。

人類の誕生からおよそ 1 万年前までの長い間、数十人程度の集団で分散して生活していた人類にとって、パンデミックは起こりえなかった。感染症が人類にとって大きな脅威となるのは、農耕や牧畜が始まり、人口が増え、都市や国が形成され、数万人から数十万人という規模での集住生活が始まってからのことである。人類は約 1 万年前の最終氷期の終了に伴う大規模な気候変動・環境変化に適応し、農耕や牧畜という自然の人工化、新しい道具や生活環境を作り出す技術的発達、新しい世界観や価値観、社会関係などの創出という人類特有の現象（＝文明）を生み出した。それは人類に繁栄をもたらしたが、同時に戦争、環境破壊、差別、貧困などの多くの問題も生ぜしめた。感染症のパンデミックもそのひとつである。

現代社会が抱えるさまざまな課題は、長い歴史の中でヒト、社会、技術、環境が相互に密接に関連しあって発生してきたものであり、今の状況だけ、個別の要因だけを見ていては根本的な解決につながる長期的な展望を見出すことが難しい。2018 年 10 月に岡山大学に設置された文明動態学研究センターは、人文社会科学における関連分野と理化学的研究を統合した学際的研究体制を構築し、ヒトと環境の相互作用として展開する文明動態について、長・中・短期的視座からマルチ・スケールで研究することで、分野限定的研究では見えてこない人類史の実態を明らかにすることを目指している（http://shabun.ccsv.okayama-u.ac.jp/center/）。

研究センターの設置と同時期に、イタリアのトリノ大学を中心とする欧州 6 機関・企業が岡山大学をパートナー機関として実施する文理連携型国際共同プロジェクト BE-ARCHAEO がスタートした（https://www.bearchaeo.com/）。これは、欧州の科学技術・イノベーション政策の主軸である「ホライズン 2020 プログラム」の一つである「RISE（Research and Innovation Staff Exchange）プログラム」に採択された 4 年間のプロジェクトであり、先端的な知識と技術の国際的・学際的交流によって新しい分析法や研究視点を開拓し、古墳時代の吉備を中心とする日本列島の国家形成について新たな歴史像を描き出そうとするものである。化学、物理学、生物学、土壌学などさまざまな専門分野の科学者との共同研究を進めるうえで、文明動態学研究センターをベースとして、岡山大学の他の研究所や研究科の研究者とのネットワークを構築し、国際的・学際的な共同研究を実

施する体制を構築できたことは有意義であった。

2019 年に採択された新学術領域研究（研究領域提案型）「出ユーラシアの統合的人類史学：文明創出メカニズムの解明」（2019～2023 年度、領域代表　松本直子）も、文明動態学研究センターを拠点として進められている（http://out-of-eurasia.jp/）。ユーラシア大陸を出た集団がたどり着いたアメリカ大陸、日本列島、オセアニアを対象地域として、それぞれ独立して展開した文明の形成過程を比較し、考古学、民族誌、脳神経科学、心理学、自然人類学、遺伝学、天文学、感染症学、数理学などの諸分野が文理の枠を超えて連携することで、人工的環境が人間の心と身体との相互作用として形成されていくメカニズムを明らかにしようとする野心的なプロジェクトである。

昨年より続く新型コロナウイルスの世界的流行のため、上記のプロジェクトの活動は困難を極めている。しかし、このような状況であるからこそ、人間とは何か、という根本的な問いを根底に据える人文学を核とした異分野融合研究の重要性があらためて実感できる。文系の学問は、実学を重視する近年の風潮のなかで軽視される傾向があったが、技術開発や感染症対策などの極めて実利的なことも、人間についての確かな理解と長期的展望がなければ、隘路や望まない結果につながる可能性が高い。

2018 年に発生した西日本豪雨で被災した資料の整理修復活動も、今津勝紀教授が中心となって、岡山史料ネット、歴史文化試料保全西日本大学協議会と連携して進めてきた。グローバル化する世界において、人間のよりよい生活のあり方を模索すること、歴史と文化の多様性に支えられた新たな地域社会の実現を目指すことも、地方大学の研究センターの役割として重要である。

社会文化科学研究科の附置施設としてスタートした文明動態学研究センターは、2021 年度から文明動態学研究所となる予定である。これまでに築いてきた大学内外の研究者、研究組織との連携関係をさらに拡大し、人文学を核とした新しい分野融合的研究の芽を育てていきたい。興味関心のある方には、ご協力、ご参画いただければ幸いである。

健康を対象とし異分野統合を目指した研究科の開設

日本学術会議中国・四国地区会議　運営協議会委員
第二部会員（岡山大学副理事（SDGs 推進担当）・大学院ヘルスシステム統合科学研究科教授、外務大臣次席科学技術顧問）
狩野　光伸

私は臨床医学を経験した後、科学者の道に進んだ。特に難治不治の状態に悩む方々にお会いし、新しい知恵を見出していくべき動機づけを持った。こうした「現場」からの問いは、既存の一専門では扱えないからこそ解決されず残っているという印象を持つ。複数の専門の知恵を協働する必要がある。現場の問いと、体系化された科学活動とのバランスを

見出していく必要がある。地に足付けながら、新しい組み合わせを通じて一般化を目指す必要である。それにより日本でなければ想起できない研究着想を生み出せる可能性も期待する。そのために現場ニーズを汲み上げる分析型活動と科学的知見や技術シーズに基づいて解決策を模索する構成型活動が上手く組み合わさる必要がある。私はこうした想いで前所属先での基礎医学振興教育プログラムの立上げ、現所属先大学での STI for SDGs を推進してきた。では大学院教育としてはどう実現できるか。本研究科理念はここに根差す。

本研究科は、対象をヘルスシステム、すなわち、医療現場を構成する人々としくみに置く。その課題を理解し、改善の方法を探す必要は、今般の感染症の背景からも論を待たない。さらにその理解を通じて、研究及び技術開発、そして物質面及び人間の理解を併せ持てることが望ましい。個々人の専門分野を活かして行く必要もある。専門分野だけでなくて、他分野を理解できた上、必要な他者を探し出し、協働して、社会において活用されるモノやアイディアを創出する能力が必要である。この教育のために、科学諸分野を、融合よりは、有意義に組み合わせる、すなわち統合することができる「統合科学」的アプローチを実現しようと、「ヘルスシステム統合科学研究科」を 2018 年度に設置した。本研究科を構成する主たる分野は、工学、医薬・保健学、文学（哲学・倫理学・宗教学、歴史学、文化人類学)、社会学・社会福祉学（医事法学、ソーシャルイノベーション論）である。

教育の目玉はいくつかあるが、一つは統合科学という科目群である。工・医療・文を出身した学生が一堂に、互いの分野の専門を学ぶ。また、岡山大学病院を場に、医療関係者との意見交換を経ながら、その必要に応えられるような研究開発の展開を構想する。さらに、各配属研究室における研究活動の進展を、これも各分野の学生が一堂に会し、共有する。もちろん教授会もこれらの分野の教員が一堂に会して行われる。

無論、想像される通り、専門間の様々な違いからも、いろいろな越えるべきことを経験してきた。しかし、人間同士、同じ場を共有していれば、違いばかりではなく、同じところ、違っても活かし合いたいところは必ず見つかってくる。例えば、工学系の教員が文科系の学生の研究内容に質問したり、その逆が起きたり、ということも実現してきた。また医療への理解が深まる様子が見られてきた。病院で聞いた困難への学生による解決アイディアも、興味深いものが聞かれるようになってきた。また、病院側からの工学系へのアプローチも増えてきている。

まだまだ各専門間の共進化のために進むべき余地は大きいが、科学活動が社会から負託される一要素である、社会にある困難について正確性を期しながら改善していく役割に、より一層寄与して行けることを期待している。

公開学術講演会報告

公開学術講演会「地域にある大学としての先端学術の振興と地域産業イノベーションへの貢献」を、初めてのオンラインで開催

日本学術会議中国・四国地区会議　運営協議会委員
第二部会員（愛媛大学理事・副学長）
仁科　弘重

中国・四国地区には１０の国立大学があり、岡山大学と広島大学以外の８大学は、文部科学省の重点支援枠①（主として、人材育成や地域課題を解決する取組などを通じて地域に貢献する取組とともに、専門分野の特性に配慮しつつ、強み・特色のある分野で世界ないし全国的な教育研究を推進する）を選択して、「地方貢献型」の大学としてさまざまな取組を行っている。しかし、重点支援枠①を選択している地方大学においても、大学の本質として研究は不可欠であり、世界的研究を目指している教員も多い。むしろ、地域貢献だけを行いたいと考えている教員の絶対数は多くはなく、大多数の教員は、世界的レベルまでは目指さなくても、全国的には自分の専門分野をリードしたいと考えている。昔から議論されているように、研究、特に先端的基礎研究と地域産業の活性化に繋がる研究成果の社会実装、事業化との間には、「魔の川」とか「死の谷」と呼ばれるようなギャップがある。重点支援枠①を選択した地方大学は、大学の本質である「先端的基礎研究」を行いながら、地域産業の技術開発、イノベーションにも貢献しなければならないという、一見すると矛盾する期待に応えなければならない。

筆者の属する愛媛大学も、典型的な地方大学として重点支援枠①を選択しており、先端的学術研究と、地域産業の技術開発やイノベーションに繋がる応用研究の両面で成果を得ようと努力している。先端的学術研究は、全学組織である「先端研究・学術推進機構」が推進しており、全国で認定されている共同利用・共同研究拠点１００のうち２拠点を抱えており（令和２年４月現在）、地方大学としては特筆する活動である。一方、産業応用研究については、同じく全学組織である「社会連携推進機構」が推進しており、「地域密着型センター」と総称しているセンター群を県内に配置しており、愛南町に設置している「南予水産研究センター」、四国中央市に設置している「紙産業イノベーションセンター」が代表的なセンターである。この２つのセンターは、それぞれ、当該地域の産業の発展のために、共同研究や担い手育成を行っている。

今回、日本学術会議の地区会議や地方学術会議の在り方を考える上での一助として、また、地方大学における学術研究の在り方、実態について理解の共有を深めるために、令和２年１１月２１日（土）に、愛媛大学城北キャンパスで、中国・四国地区会議主催、愛媛大学共催により「地方大学の一つである愛媛大学による『先端研究』と『地方創生に繋がる産業応用研究』の展開」をテーマにした学術講演会を開催した（オンラインによる同時配信）。愛媛大学の先端研究・学術推進機構から２件の、社会連携推進機構から４件の講演

を行った。参加者は９０名（オンライン参加を含む）で、例年の会場のみで開催の公開学術講演会より多くなった。参加者は、地方大学の一つとしての愛媛大学が、「先端研究」と「地域創生に繋がる応用研究」をどのように展開しているかを共有でき、有意義な講演会となった。

本学術講演会は、中国・四国地区会議としては初めての「会場参加、オンライン参加併用」の学術講演会となった。オンライン参加された人からのアンケート結果（自由記述）は、表のとおりであった。移動をする必要がないことのメリットは、多くの人が言及しており、また、オンライン配信した画像なども問題なかったようである。しかし、やはり質疑応答やディスカッションは行いにくい側面もあり、事前質問受付やチャット機能の活用など、工夫が必要である。

オンラインでの講演の様子
（愛媛大学南予水産研究センター　後藤理恵　准教授）

なお、同日、学術講演会の前に、地区会議運営協議会をやはりオンラインで行った。

【表　オンライン配信に関するアンケート結果（自由記述）】

時間と旅費を気にせず参加できるのはありがたいと思いました。
感染リスクはもちろん，移動時間等を気にすることなく参加することができた。
遠方在住のため、本来なら聴講できない講演会でしたが、オンラインのおかげで聴講でき良かったです。
オンラインの方が出張が不要で時間的に融通が効くのと、入室退出が自由なので参加しやすい。
通信トラブルなどなく講演を聴くことができ、オンライン配信を続けていただきたいと思った。
音声も聞き取りやすくスライド画像もよく見えました。

第 25 期会員・連携会員一覧（中国・四国地区）

（凡例）
○:会員
　　:運営協議会委員

（令和3年2月現在）
会員･連携会員数　112名（女性31名、男性81名）

【鳥取県】 6名（女性0名、男性6名）

	氏名	専門分野		所属・職名	任期
	安藤　泰至	哲学		鳥取大学医学部准教授	25-26期
	河田　康志	基礎生物学		鳥取大学理事・副学長	24-25期
	辻本　壽	農学	基礎生物学	鳥取大学乾燥地研究センター教授	24-25期
	恒川　篤史	環境学	農学	鳥取大学乾燥地研究センター教授	25-26期
	畠　義郎	基礎医学		鳥取大学医学部生命科学科・教授	25-26期
	矢部　敏昭	心理学・教育学	数理科学	鳥取大学副学長	24-25期

【島根県】 6名（女性2名、男性4名）

	氏名	専門分野		所属・職名	任期
	岩瀬　峰代	心理学・教育学	基礎生物学	島根大学教育・学生支援機構大学教育センター准教授	24-25期
	浦野　健	基礎医学	基礎生物学	島根大学医学部医学科教授	25-26期
	小林　祥泰	臨床医学		島根大学医学部特任教授、島根大学名誉教授	24-25期
	齋藤　文紀	地球惑星科学		島根大学エスチュアリー研究センター　センター長・教授	24-25期
	松崎　有未	基礎医学		島根大学医学部生命科学講座教授	24-25期
	山本　達之	化学		島根大学生物資源科学部生命工学科教授	24-25期

【岡山県】 19名（女性5名、男性14名）

	氏名	専門分野		所属・職名	任期
	稲垣　賢二	食料科学	農学	岡山大学大学院環境生命科学科教授	24-25期
	大藤　剛宏	臨床医学		岡山大学病院臓器移植医療センター長・教授	24-25期
	小川　容子	心理学・教育学		岡山大学大学院教育学研究科教授	24-25期
	尾崎　博	食料科学		岡山理科大学獣医学部教授	24-25期
	柏原　直樹	臨床医学		川崎医科大学腎臓・高血圧内科学主任教授 川崎医科大学副学長	24-25期
	梶原　毅	数理科学		岡山大学大学院環境生命科学研究科教授	24-25期
○	狩野　光伸	基礎医学	薬学	岡山大学副理事・大学院ヘルスシステム統合科学研究科教授	25-26期
	久保　康隆	農学		岡山大学大学院環境生命科学研究科教授	24-25期
	窪木　拓男	歯学		岡山大学大学院医歯薬学総合研究科教授	24-25期
	坂本　亘	基礎生物学		岡山大学資源植物科学研究所教授	24-25期
	竹本　与志人	社会学		岡山県立大学保健福祉学部教授	24-25期
	中谷　文美	地域研究		岡山大学大学院教授	25-26期
	那須　保友	臨床医学		岡山大学　理事・副学長、泌尿器病態学教授	25-26期
	平沢　晃	臨床医学	健康・生活科学	岡山大学大学院医歯薬学総合研究科病態制御科学専攻腫瘍制御学講座教授	25-26期
	松本　直子	史学		岡山大学大学院社会文化科学研究科教授	25-26期
	村松　潤一	経営学		岡山理科大学経営学部教授、広島大学名誉教授	24-25期
	山下　敦子	基礎生物学		岡山大学大学院医歯薬学総合研究科教授	25-26期
	山内　泰子	臨床医学	基礎医学	川崎医療福祉大学医療福祉学部医療福祉学科・教授	25-26期
	吉野　雄二	数理科学		岡山大学大学院自然科学研究科教授	24-25期

【広島県】 45名（女性14名、男性31名）

	氏名	専門分野		所属・職名	任期
○	相田　美砂子	化学		広島大学特任教授・学長特命補佐	24-25期
	相原　玲二	情報学		広島大学副学長・情報メディア教育研究センター教授	25-26期
	秋野　成人	法学		広島大学大学院法務研究科教授	24-25期
	有元　伸子	言語・文学		広島大学大学院人間社会科学研究科教授	25-26期
	稲葉　俊哉	基礎医学	臨床医学	広島大学原爆放射線医科学研究所教授	25-26期
	浮穴　和義	基礎生物学		広島大学大学院総合科学研究科教授	24-25期
	江頭　大蔵	社会学		広島大学大学院人間社会科学研究科教授	24-25期
	大芝　亮	政治学		広島市立大学・広島平和研究所長・特任教授	25-26期
	大段　秀樹	臨床医学		広島大学副学長・広島大学院医系科学研究科長	25-26期
	岡村　好子	統合生物学		広島大学大学院統合生命科学研究科教授	25-26期
	岡本　哲治	歯学	基礎医学	東亜大学医療学部長・教授	25-26期
	奥村　晃史	地球惑星科学		広島大学大学院人間社会科学研究科教授	25-26期
○	越智　光夫	臨床医学		広島大学学長・整形外科教授	24-25期
	片柳　真理	法学	政治学	広島大学大学院国際協力研究科教授	24-25期
	角谷　快彦	経済学		広島大学大学院人間社会科学研究科教授	25-26期
	神谷　研二	基礎医学		広島大学副学長・緊急被ばく医療推進センター長 福島県立医科大学副学長・放射線医学県民健康管理センター長	25-26期
	亀井　清華	情報学		広島大学大学院先進理工系科学研究科准教授	24-25期
	清原　昭子	農学		福山市立大学都市経営学部教授	25-26期
	栗原　英見	歯学		下松デンタルアカデミー専門学校　学校長	24-25期
	小山　正孝	心理学・教育学		広島大学大学院人間社会科学研究科教授	24-25期
	斎藤　祐見子	基礎医学		広島大学大学院総合科学研究科教授	24-25期
○	坂田　省吾	心理学・教育学	基礎医学	広島大学大学院人間社会科学研究科教授	25-26期
	佐藤　利行	言語・文学		広島大学理事・副学長	24-25期
	新福　洋子	健康・生活科学		広島大学大学院医系科学研究科教授	25-26期
	杉立　徹	物理学		広島大学　学術室　特任教授	24-25期
	住居　広士	社会学		県立広島大学大学院教授	25-26期
	高野　幹久	薬学		広島大学大学院医系科学研究科教授・薬学部長	24-25期
	田代　聡	基礎医学	基礎生物学	広島大学原爆放射線医科学研究所所長	25-26期
	田中　純子	基礎医学	健康・生活科学	広島大学副学長、大学院医系科学研究科教授	24-25期

【広島県の続き】

	氏名	専門分野		所属・職名	任期
	茶山　一彰	臨床医学		広島大学大学院医歯薬保健学研究院教授	24-25期
	都留　稔了	化学		広島大学大学院工学研究科教授	24-25期
	富永　依里子	電気電子工学		広島大学大学院先進理工系科学研究科講師	25-26期
	中坪　史典	心理学・教育学		広島大学大学院人間社会科学研究科准教授	24-25期
	藤原　章正	土木工学・建築学	環境学	広島大学大学院国際協力研究科教授	24-25期
	前田　香織	情報学		広島市立大学大学院情報科学研究科教授	24-25期
	水羽　信男	史学		広島大学大学院総合科学研究科教授	24-25期
	宮谷　真人	心理学・教育学		広島大学理事・副学長	24-25期
	觀山　正見	物理学		広島大学学長室特任教授	24-25期
	森山　美知子	健康・生活科学		広島大学大学院医系科学研究科教授	25-26期
	森吉　千佳子	化学	物理学	広島大学大学院先進理工系科学研究科教授	24-25期
	安井　弥	基礎医学		広島大学大学院医系科学研究科分子病理学教授	24-25期
	薮田　ひかる	地球惑星科学	化学	広島大学大学院先進理工系科学研究科教授	24-25期
	山本　卓	基礎生物学		広島大学大学院統合生命科学研究科教授	25-26期
	山本　陽介	化学		広島大学大学院理学研究科教授	24-25期
	山脇　成人	臨床医学		広島大学特任教授	25-26期

【山口県】 5名（女性2名、男性3名）

	氏名	専門分野		所属・職名	任期
	荊木　康臣	農学	食料科学	山口大学大学院創成科学研究科教授	25-26期
	鈴木　隆泰	哲学		山口県立大学国際文化学部教授	25-26期
	中田　薫	食料科学		国立研究開発法人水産研究・教育機構理事	24-25期
	林　裕子	基礎医学	経営学	山口大学大学院技術経営研究科教授（特命）	24-25期
	藤澤　健太	物理学		山口大学時間学研究所長・教授	25-26期

【徳島県】 12名（女性1名、男性11名）

	氏名	専門分野		所属・職名	任期
	石丸　直澄	歯学		徳島大学大学院医歯薬学研究部教授	24-25期
○	市川　哲雄	歯学		徳島大学大学院医歯薬学研究部教授	24-25期
	大久保　徹也	史学		徳島文理大学文学部教授	25-26期
	香美　祥二	臨床医学	基礎医学	徳島大学病院病院長、医学部小児科教授	24-25期
	片桐　豊雅	基礎医学		徳島大学先端酵素学研究所所長・教授・徳島大学副理事	25-26期
	菊地　哲朗	基礎医学	食料科学	大塚製薬株式会社医薬品事業部シニアフェロー（研究部門担当）	24-25期
	曽根　三郎	臨床医学		徳島市病院局病院事業管理者	24-25期
	中村　浩一	材料工学		徳島大学大学院社会産業理工学研究部理工学域教授	25-26期
	西岡　安彦	臨床医学		徳島大学大学院医歯薬学研究部呼吸器・膠原病内科学分野教授	24-25期
	姫野　誠一郎	薬学	健康・生活科学	徳島文理大学薬学部教授	24-25期
	松山　美和	歯学		徳島大学大学院医歯薬学研究部教授	24-25期
	安友　康二	基礎医学	臨床医学	徳島大学大学院医歯薬学研究部教授	24-25期

【香川県】 3名（男性3名）

	氏名	専門分野		所属・職名	任期
	堤　英敬	政治学		香川大学法学部教授	24-25期
○	平田　オリザ	言語・文学		四国学院大学社会学部教授	25-26期
	笠　潤平	物理学	心理学・教育学	香川大学教育学部教授	25-26期

【愛媛県】 7名（女性4名、男性3名）

	氏名	専門分野		所属・職名	任期
	井口　梓	地域研究		愛媛大学社会共創学部地域資源マネジメント学科准教授	25-26期
	片岡　圭子	農学		愛媛大学農学研究科教授	25-26期
	高橋　憲子	食料科学		国立大学法人愛媛大学大学院農学研究科准教授	25-26期
	内藤　俊雄	化学		愛媛大学大学院理工学研究科環境機能科学専攻教授	25-26期
○	仁科　弘重	農学	食料科学	愛媛大学理事・副学長	24-25期
○	堀　利栄	地球惑星科学		愛媛大学理工学研究科教授・学長特別補佐	25-26期
	吉川　泰弘	食料科学	農学	岡山理科大学獣医学部長	24-25期

【高知県】 9名（女性3名、男性6名）

	氏名	専門分野		所属・職名	任期
	岩田　誠	情報学		高知工科大学教授	24-25期
	宇高　恵子	基礎医学		高知大学医学部教授	25-26期
	枝重　圭祐	食料科学		高知大学農林海洋科学部教授	24-25期
	緒方　賢一	法学		高知大学教育研究部人文社会科学系教授	25-26期
	神原　咲子	健康・生活科学		高知県立大学大学院看護学研究科教授	25-26期
	小島　優子	哲学		高知大学人文社会科学系人文社会科学部門准教授	25-26期
	西條　辰義	経済学	環境学	高知工科大学フューチャー・デザイン研究所所長 総合地球環境学研究所特任教授	25-26期
	中川　善典	環境学	土木工学・建築学	高知工科大学経済・マネジメント学群准教授	25-26期
	那須　清吾	総合工学	土木工学・建築学	高知工科大学学長特別補佐	24-25期

§会員・連携会員の登録事項変更手続のご案内§

登録事項（住所、所属・職名等）に変更がございましたら、日本学術会議中国・四国地区会議事務局にご連絡いただきますようお願いいたします。

E-mail:gakujutu-ssoumu@office.hiroshima-u.ac.jp

地区会議事務局からのお知らせ

令和２年度日本学術会議中国・四国地区会議事業報告

事　業　名	期日（時期）	場　　所	事　業　内　容
第１回 地区会議運営協議会	11 月 21 日 （土）	オンライン開催	【協議事項】 ①　令和２年度公開学術講演会について ②　令和３年度公開学術講演会について ③　令和２年度地区ニュース（No.52）について ④　地区会議の動向（「学術の動向」）について
第１回 公開学術講演会	11 月 21 日 （土）	愛媛大学（松山市）を会場としてオンライン開催	【テーマ】 「地域にある大学としての先端学術の振興と地域産業イノベーションへの貢献」
地区ニュースの発行 (NO.52)	３月		中国・四国地区の日本学術会議会員・連携会員及び教育研究機関等へ配布
第２回 地区会議運営協議会	３月 11 日 （木）	オンライン開催	【協議事項】 ①令和２年度事業報告及び令和３年度事業計画について ②令和３年度公開学術講演会について ③令和２年度地区ニュース（No.52）について

原稿募集

地区ニュースは科学者の方々と日本学術会議中国･四国地区会議との連繋を図ることを主な目的としております。

日本学術会議あるいは教育、研究、学術等に関する率直なご意見、ご希望等をお寄せくださいますようお願い致します。

お願い

回覧等により、多くの方々に読んで頂きますよう、ご配慮願います。

日本学術会議中国・四国地区会議事務局
〒739-8511　東広島市鏡山一丁目３番２号
（広島大学 学術･社会連携室 学術･社会連携部）
TEL： 082-424-5675　FAX：082-424-4592
E-mail:gakujutu-ssoumu@office.hiroshima-u.ac.jp

日本学術会議地区会議（中国・四国地区会議）
https://www.hiroshima-u.ac.jp/research/science_council_of_japan